

災害時における子どもの「生きる力」に関する一考察 —東日本大震災を経験した宮城県立多賀城高校生徒を 対象にしたワークショップ調査から—

An Analysis of “Zest for Living in Disaster” in Young Generation
- Worshop Survey to Tagajo High School Students Affected in
the 2011 East Japan Earthquake Disaster -

○佐藤 翔輔¹, 小野 敬弘², 岡田 正己³, 小林 由夏³, 今村 文彦¹
Shosuke SATO¹, Takashiro ONO², Masaki OKADA³, Yuka KOBAYASHI³ and
Fumihiko IMAMURA¹

¹ 東北大学 災害科学国際研究所

International Institute od Disaster Science, Tohoku University

² 宮城県立多賀城高校

Miyagi Prefectural Tagajo High School

³ 株式会社 博報堂

Hakuhodo Co., Ltd.

This paper reports on a comparative study of “Zest for Living in disaster” in young generation with earlier study of adult generation. The survey was conducted based on workshop which 11 students in Tagajo High School, Miyagi prefecture and analysis the text data. The main results are as follows: 1) Correspondence and handling cases are divided into two categories of Emergency response and response to the future. 2) Appropriate response of young generation has high frequency of motivation about disaster experience tradition, physical capacity and coolness than adult generation in previous work.

Keywords : “zest for living”, children ,exploratory study, the 2011 East Japan Earthquake disaster, workshop

1. はじめに

災害時、被災者は種々の困難な場面に遭遇し、その対応・対処を迫られる。揺れ発生時や津波来襲時に適切な避難行動をとる、避難所を上手く運営する、復興に向けた合意形成を適切にリードする等々、それら困難な状況への対応には人間個人や集団の様々な内的な力（適切な考え方・性格・認識など）が求められる。

この内的な力について、佐藤ら¹⁾は「これからの人たちに必要な力」として1996年に中央教育審議会が答申した「生きる力」の名を借りた。この「生きる力」は、「1) 自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力、2) 自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性、3) たくましく生きるためにの健康や体力」と定義されている²⁾。

佐藤ら¹⁾は、災害時の「生きる力」とは何かを解き明かすことを目的とし、東日本大震災の発生当時、宮城県内の沿岸15市町に居住もしくは就業していた20歳以上の78名の被災者を対象にした面接調査およびそのテキスト分析を通じて、災害時の「生きる力」の探索的な研究を行った。先行研究では、災害時の「生きる力」を「困難とその対応・対処の事例」と「対応・対処できた理由」の組合せで捉え、前者15種類、後者23種類の存在を確認するとともに、発災直後の緊急対応、応急対応、個人の復興に関する「生きる力」のほか、フェーズに関わらない「生きる力」が存在することが明らかになった。

本研究では、東日本大震災で被災した子どもを対象にした調査を実施し、その結果と先行研究の比較を通して、得られた知見の普遍性や災害時における子ども「生きる力」の特徴を明らかにすることを試みた。

2. 方法

災害時の子どもの「生きる力」の調査を、ワークショップ形式で行った。ワークショップの手続きが次のとおりである：

- 1) 趣旨説明（10分）
 - 2) アイスブレイク（10分）
 - 3) 東日本大震災の発生したとき・あとに、自分が体験した「大変だったこと」や「がんばったこと」をイエローの付箋に書く（20分）。
 - 4) 「それができた理由」として、ピンクの付箋に書く。書いた付箋は、対応する2)の付箋の下に貼る。なお、「それができた理由」は、一つの「大変だったこと・がんばった」に対して複数枚書いてよい（20分）。
 - 5) 各グループの中で、発表しやすいように簡易的な構造化を行う（20分）。
- 2) の「大変だったこと・がんばったこと」は、先行研究の「困難とその対応・対処できた事例」に、「それができた理由」は「対応・対処できた理由」に該当する。
- ワークショップ調査には、宮城県立多賀城高等学校（以下、多賀城高校）の生徒を対象に、2014年1月27

日に実施した。参加生徒の内訳は、1年生4名（男2, 女2）、2年生（男2, 女2）、3年生3名（男2, 女1）である。2011年東日本大震災発生当時は、全員が宮城県内に居住する中学生であり、大なり小なり震災の影響を受けていた。ワークショップの様子を写真1に示す。なお、多賀城高校は、2016年4月に災害科学科の設置が予定されている。

3. 結果

表1と表2にワークショップで得られた2) 3) の付箋を先行研究¹⁾の枠組みで整理し、比較した結果を示す。表1には、事例ラベル（成人：困難とその対応・対処の事例、高校生：大変だったこと・がんばったこと）、表2には理由ラベル（成人：対応・対処できた理由、高校生：それができた理由）を示している。

表1を見ると、成人、高校生とも「自発的に無償の奉仕をする」「避難生活・被災生活を乗り切る」が多いことが分かる。一方、成人では上位になった「技能・専門性を活かして使命・役割を果たす」は、高校生では少ない。青年期に修得されている技術・知識が、成人に比べて少ないと想像される。高校生の方では。

「家族と再会する」が上位になっている。成人の調査結果では存在していた「リーダーシップを發揮して組織・グループを取りまとめる」「仕事を再開する」「生きがいに徹する」は高校生には存在しなかった。これらも、青年期には存在しづらい事例である。成人には存在せず、高校生だけに存在が確認された事例は「情報を積極的に収集する」である。このラベルに分類された付箋の記述は、「ラジオを使って情報を集めた（3年生、男子）」

「町内一周して状況を把握した（2年生、男子）」「まず地元を知ろうと仮設住宅の方にお話を聞きに行った（2年生、女子）」となっており、自分の足やツールによって積極的に情報を集める行動が見られている。

表2を見ると、成人、高校生とも「人間関係の強さ」が、対応・対処できた理由として最も多い。成人では「アイデンティティー」や「しつけ・環境」が多くたるのに対して、高校生では「備え・知識」「援助」が多い。「備え・知識」が上位にあることは、学校教育の中での、日頃からの防災教育や実践が活きた可能性としてうかがえる。成人の調査結果では存在していた「災害経験」

「意志力」「趣味」「人間好き」「ガッツ」「意志のバトン」「直感」は高校生には存在しなかった。人生の経験が絶対量が成人に比べて少ないことが、これらの理由を確認できなかった一要因として考えられる。成人には存在せず、高校生だけに存在が確認された対応・対処できた理由は「外部・後世への発信意欲」「体力」の2種類であった。前者に分類された付箋の記述の例としては、「震災時、自分は全くといっていいほど何もできなかつた。なら今できることは何?と考えて、地域の中に津波の痕跡高さを残す活動に参加した（2年生、男子）」

「自分の体験を伝えて被害を小さくしたいと思ったから。自分の気持ちに整理をつけたかったから（2年生、男子）」「震災のことを知らない世代の人にも伝えたいと思ったから（1年生、女子）」などがあり、被災地の外や未来に震災の体験を伝えていきたいという高い意欲が様々な活動を成し得た背景にあることがうかがえる。後者に分類された付箋の記述の例としては、「体力があつたので、なるべく自転車を使った（3年生、男子）」「自分が家族の中で体力のある方だったので（小）」



写真1 ワークショップの様子（多賀城高校）

表1 事例ラベルの比較（成人、高校生）

事例ラベル	成人 佐藤ら（2014）		高校生 (発災時:中学生)	
自発的に無償の奉仕をする	24	16.3%	18	16.8%
技能・専門性を活かして使命・役割を果たす	23	15.6%	3	2.8%
避難生活・被災生活を乗り切る	19	12.9%	44	41.1%
津波からの避難に成功する	17	11.6%	5	4.7%
リーダーシップを發揮して組織・グループを取りまとめる	16	10.9%	0	0.0%
仕事を再開する	12	8.2%	0	0.0%
すまいを再建する・目指す	10	6.8%	2	1.9%
思考によって対処する	7	4.8%	5	4.7%
家族と再会する	4	2.7%	8	7.5%
立ち直って明るく生活する	4	2.7%	6	5.6%
家族の中の弱者を守る	3	2.0%	1	0.9%
支援を受ける	3	2.0%	4	3.7%
次の災害に備える	3	2.0%	5	4.7%
コミュニティを優先する	1	0.7%	3	2.8%
生きがいに徹する	1	0.7%	0	0.0%
情報を積極的に収集する	0	0.0%	3	2.8%

学校のプールに水を汲みに行った、1年生、女子）」などがあり、被災生活を体力とともに力強く生き抜いた様子が読み取れる。

表3に、事例ラベルと理由ラベルをクロス集計した結果を示す。成人では、クロス集計表を行方向にみたときに、比率が10.0%を超えていて、かつ2件以上存在する組み合わせについては、該当セルに色塗りをしている。

成人では、1) 「自発的に無償の奉仕をする」は「人間関係の強さ」「アイデンティティー」「しつけ・環境」が、2) 「避難生活・被災生活を乗り切る」は「人間関係」「援助」「自己客観視」「備え・知識」が、3) 「仕事を再開する」は「人間関係の強さ」「アイデンティティー」「責任感」が、4) 「リーダーシップを發揮して組織・グループを取りまとめる」は「人間関係の強さ」「アイデンティティー」「責任感」「利他性」が、5) 「津波からの避難に成功する」は「災害経験」「備え・知識」「集団の力」が、6) 「思考によって対処する」は「楽観的」「人間関係」「冷静」「しつけ・環境」「自己客観視」が、7) 「すまいを再建する・目指す」は「人間関係の強さ」「前向き」「行動的」「ガッツ」が、8) 「立ち直って明るく生活する」は「人間関係」「楽観的」「仕事に意欲的」が、9) 「家族と再会する」は「援助」「集団の力」が、10) 「家族の中の弱者を守る」は「人間関係の強さ」が寄与している傾向が見られた（文献1) 参照）。このうち、高校生にも頻度が高い組合せとし

表3 事例ラベルと理由ラベルのクロス集計結果（高校生）

	人間関係の強さ	アイデンティティ	しつけ・環境	楽観的	援助	責任感	利他性	自己客観視	集団の力	備え・知識	高い仕事意欲	行動力	前向き	冷静	コミュニケーション	外部・後世への発信意欲	体力	計
自発的に無償の奉仕をする	3 17.6%		1 5.9%		1 5.9%	2 11.8%	4 23.5%		1 5.9%	3 17.6%	1 5.9%						1 5.9%	17 100%
技能・専門性を活かして使命・役割を果たす			0 0.0%		1 50.0%											1 50.0%		2 100%
避難生活・被災生活を乗り切る	5 29.4%		1 5.7%	2 5.7%	2 5.7%		1 2.9%	1 2.9%	6 17.1%	6 17.1%	2 5.7%	4 11.4%		1 2.9%		2 5.7%	35 86%	
津波からの避難に成功する										66.7%			33.3%					100%
思考によって対処する					1 33.3%		1 33.3%									1 33.3%		3 100%
家族と再会する	1 16.7%				1 16.7%				1 16.7%		1 16.7%		1 16.7%					6 100%
立ち直って明るく生活する					1 25.0%			1 25.0%					1 25.0%	1 25.0%				4 100%
家族の中の弱者を守る	1 100.0%																1 100%	
支援を受ける	2 50.0%				2 50.0%												4 100%	
次の災害に備える		1 25.0%													3 75.0%		4 100%	
コミュニケーションを優先する	1 33.3%		1 33.3%											1 33.3%	2 66.7%		3 100%	
情報を積極的に収集する														33.3%			3 100%	
計	13	1	3	2	9	4	5	2	2	12	1	7	2	7	2	5	5	85

表2 理由ラベルの比較（成人、高校生）

理由ラベル	成人 佐藤ら(2014)		高校生 (発災時:中学生)	
人間関係の強さ	31	11.8%	13	15.3%
アイデンティティ	30	11.5%	1	1.2%
しつけ・環境	19	7.3%	3	3.5%
楽観的	18	6.9%	2	2.4%
援助	17	6.5%	9	10.6%
責任感	17	6.5%	4	4.7%
利他性	17	6.5%	5	5.9%
自己客観視	14	5.3%	2	2.4%
集団の力	13	5.0%	2	2.4%
備え・知識	12	4.6%	12	14.1%
高い仕事意欲	10	3.8%	1	1.2%
行動力	9	3.4%	7	8.2%
災害経験	7	2.7%	0	0.0%
意志力	7	2.7%	0	0.0%
趣味	7	2.7%	0	0.0%
前向き	6	2.3%	2	2.4%
冷静	6	2.3%	7	8.2%
コミュニケーション	5	1.9%	2	2.4%
人間好き	5	1.9%	0	0.0%
ガッツ	3	1.1%	0	0.0%
意志のバトン	3	1.1%	0	0.0%
地域愛	3	1.1%	5	5.9%
直感	3	1.1%	0	0.0%
外部・後世への発信意欲	0	0.0%	5	5.9%
体力	0	0.0%	3	3.5%
計	262	100%	85	100%

て確認されたのは、1) 「自発的に無償の奉仕をする」は「人間関係の強さ」、2) 「避難生活・被災生活を乗り切る」と「人間関係の強さ」、5) 「津波からの避難に成功する」と「備え・知識」のみであった。それ以外は、11) 「自発的に無償の奉仕をする」は「責任感」「利他性」「備え・知識」、12) 「避難生活・被災生活を乗り切る」は「備え・知識」「行動力」「冷静」、13) 「支援を受ける」は「援助」、14) 「次の災害に備える」は「外部・後世への発信意欲」、15) 「情報を積極的に収集する」は「地域愛」の組合せが比較的多く出現していた。中でも高校生の「冷静」の頻度が成人よりも高いことは特徴的である。

両者の対応関係を視覚的に表すために、クロス集計結果に対してコレスポンデンス分析を行った結果を図1に示す。

図1中のプロットは、左側と右側の大きく2群に分けられる。図1の右側には、多くの事例ラベルと理由ラベルが位置しており、その事例ラベルの多くが発災直後や応急対応に関するものである。それに対して、図1の左側には「次の災害に備える」「外部・後世への発信意欲」が配置している。成人を対象に調査した例は、発災八歳直後、応急対応、復旧・復興対応、ファーズに関わらないことの4種類のグループが見られたのに対して、高校生では、発災直後と応急対応に関する群のみ見られた。さらに、直接的な復旧・復興対応ではなく、未来につながる活動としての群（未来対応）が見られたのが特徴的である。

なお、通常、コレスポンデンス分析においては、軸の解釈を行うが、この分析結果においては明瞭な軸の傾向が見られなかった。ケースの件数が多くなかったこと等が影響していると考えられ、今後の課題とした。

4. おわりに

本研究では、宮城県立多賀城高校の生徒を対象にしたワークショップ調査を行い、災害時の子どもの「生きる力」の探索的研究と、先行研究の枠組みに照らしあわせた比較研究を行った。本研究の結果は、下記のとおりにまとめられる：

- 1) 「大人（成人）」と「子ども：高校生（発災当時：中学生）」の生きる力は大きく異なっていた。
- 2) 子どもの「生きる力」が作用するフェーズは、発災

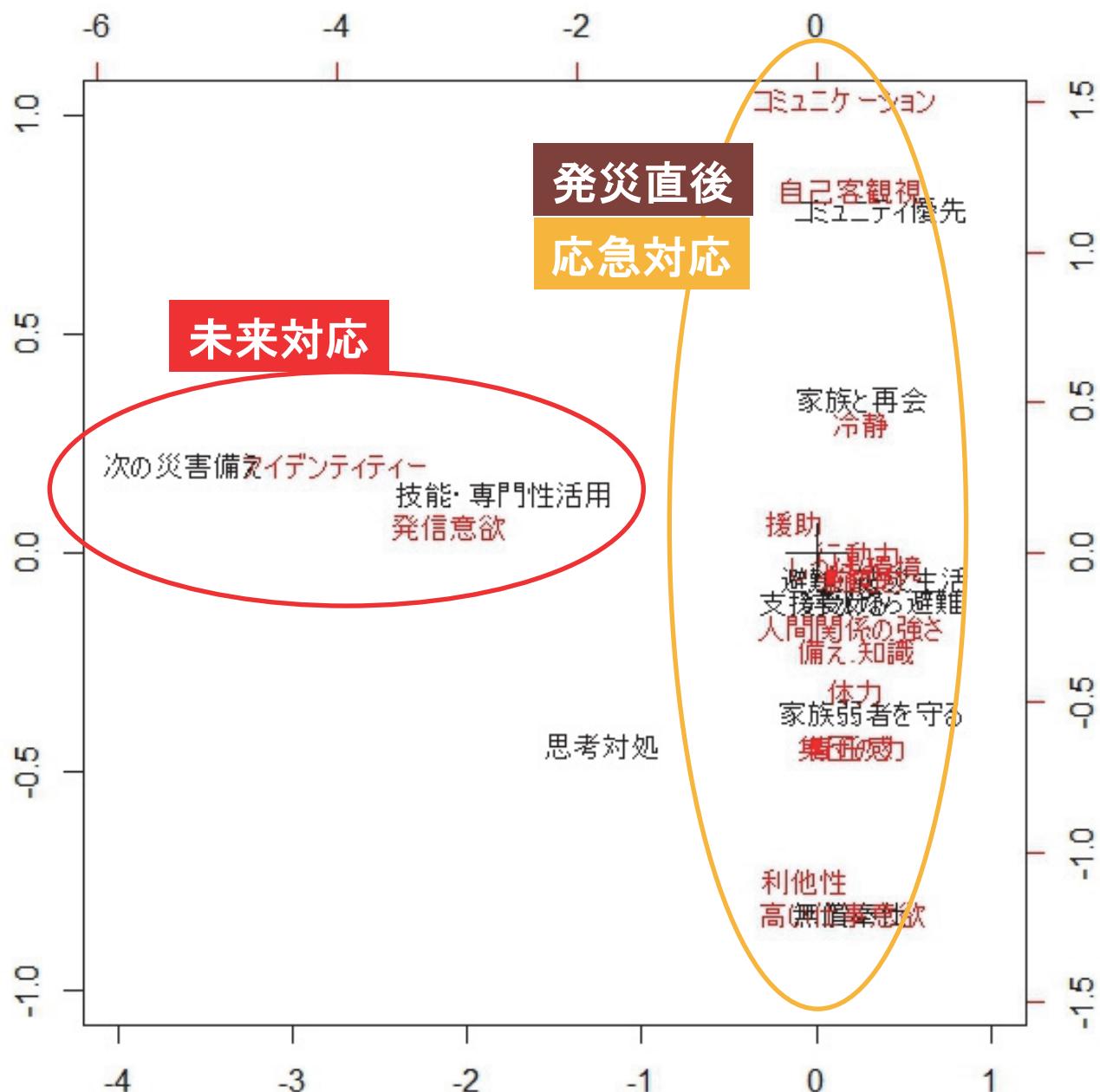


図1 災害時の困難に対応・対処した事例ラベルと理由ラベルのコレスポンデンス分析結果（多賀城高校）

直後、応急対応、さらに未来対応が中心である。

- 3) 発災直後や応急対応としては、避難生活・被災生活における彼らの様々な行動、さらには情報を積極的に取りに行く行動が見られた。これを支える事前の備えや普段からの防災教育で培った知識が、その背景にあった。
- 4) 未来対応としては、外部・後世へ残そうとする高い意欲が、「次の災害への備え」として震災伝承や防災活動が行われていた。
- 5) このほか、成人に比べて、「備え・知識」「体力」「冷静」によって支えられてる部分が多いことも特徴的である。

のである。また、ワークショップの資料整理等においては、東北大学災害科学国際研究所・技術補佐員の後藤さつき氏と網田早苗氏に協力いただいた。

参考文献

- 1) 佐藤翔輔、杉浦元亮、野内類、邑本俊亮、阿部恒之、本多明生、岩崎雅宏：災害時の「生きる力」に関する探索的研究－東日本大震災の被災経験者の証言から－、地域安全学会論文集、No.23、2014.7.
- 2) 文部科学省：中央教育審議会第一次答申パンフレット、21世紀を展望した我が国の教育の在り方について－子供に「生きる力」と「ゆとり」を－、1996.

謝辞

ワークショップにおいては、多賀城高校生徒及び教職員に協力をいただいた。本事業は、本事業は平成25年度復興庁「新しい東北」先導モデル「『生きる力』市民運動化プロジェクト」（実施主体：「生きる力」市民運動化プロジェクト）によるも